ISSN 0914-3157

2020年8月5日発行（毎月1回5日発行）
通巻500号 昭和61年7月15日第三種郵便物認可

ほんのしるべ

書標

2020.
8月号

世界の本屋さん vol.103

ブルガリア・ソフィア ヘリコン書店

ノセ事務所　能勢　仁

一九八一年ブルガリア建国千三百年を記念して建てられた国立文化宮殿の近くにある書店で、一九九二年の創業である。この周辺にはテレビ局、ラジオスタジオ、劇場などがある。静かな環境に恵まれた場所で、多くの人が訪れる地域であった。

とにかくお洒落な店である。床、壁、天井、什器、階段等、来店客がこの書店の雰囲気に酔っているのかもしれない。一、二階の売場の書店で、売場に重厚感がある。什器もそれに応える如く、木製でどっしりしている。金属製やスチール製だったら、店内の落ち着いた雰囲気は演出できないであろう。

一階は大人向けの売場である。詩集、アート、写真集が面陳列でお客様を呼んでいる。文学書は棚に面と差し陳列のコントラストで演出効果満点である。柱の角、書棚の角の空間の仕様、陳列が抜群によい。ヘリコン書店の陳列バラエティには驚くばかりである。この書店には陳列パティシエが居るのだろうと思ってしまう。二階はこどもフロアーと言ってよい。当店専売のジグソーが平台と柱面を飾っている。窓側は書棚にしないで、ソファーのあるレストスペースになっている。一階に負けない陳列効果は、店内全体のゆったり感によって演出されている。店周辺の文化施設にマッチした書店であった。

（表紙題字・陳舜臣）

だが彼は、どんなにこれを繰り返そうと、夏への扉を探すのを、決してあきらめようとはしなかった。

そして一九七〇年十二月の三日、かくいうぼくも夏への扉を探していた。

ロバート・A・ハインライン著

『夏への扉』（ハヤカワ文庫）より

もくじ

世界の本屋さん　103

「書標」歳時記〈8月〉　1

著書を語る579　「『動きだした時計』に寄せて」　小松　みゆき　2

書標・書評　『感染症社会』ほか　4

特集　コロナ禍の中で想像力を鍛える　6

いまから始める　11

今月のおすすめ

社会科学　18　コンピュータ　20

自然科学　21　医学書　22

人文科学　23　文学・文芸　24

文庫・新書　25　芸術　26

実用書　27　地図・旅行書　27

語学・辞典　28　児童書　29

インフォメーション　30

本屋うらばなし　「『本のしるべ 書標』へのみじかい手紙」

※表示価格はすべて本体価格です。

「『動きだした時計』に寄せて」

小松　みゆき

昨年二月、ベトナムの首都ハノイのラジオ局で働いている私は、旧正月の休暇で一時帰国中だった。渋谷の鍋料理屋で古い友人たちに会い、「遺言代わりに、このテーマで本を書きたいんだ」と打ち明けた。

テーマというのは、ベトナム残留日本兵とその家族のことだ。ベトナムには、第二次世界大戦後に復員せず、ベトミン軍に投じてフランスからの独立戦争を戦った旧日本兵がいた。彼らは九年後に帰国を促されるのだが、現地で得た家族は残され、その後は音信が途絶えてしまう。

一九九二年、日本語教師として赴任したハノイで、私は「私ノ父ハ日本人デス」と言う人々と出会った。同世代ということもあって他人事とは思えず、彼らの調査を手伝うようになった。後にハノイで同居するようになった私の認知症の母親は残留日本兵の妻たちと同世代でもあり、家族ぐるみの付き合いをしていた。

歴史の狭間に埋もれかけていた彼らに脚光があたったのは、二〇一七年にベトナム訪問中の天皇陛下（当時）との対面だった。さらに、日本への墓参の旅まで実現した。その一部始終に立ち会った私は、彼らのことを私が書き残さないといけないと強く思ったのだった。

鍋を囲んでいた友人は、ベトナム残留日本兵のドキュメンタリーを制作したテレビマンと、ハノイ在住経験があるフリー編集者。二人は「それはみゆきさんの使命」「応援する」と身を乗り出した。しかし、こんな地味なテーマに興味を持ってくれる出版社があるだろうか。

「『めこん』なら……」と言いだしたのは誰だったか。アジアにゆかりのある人間にはおなじみの名前である。理想的だが、研究書のような「立派な本」のイメージが強い。伝手をたどって紹介を受け、編集者と一緒に緊張しながら訪問した。アジア関係の本が所狭しと積み上がった事務所で、めこんの桑原晨社長は「残留日本兵は、いつか本にしたいと思っていました」と切り出した。ああ、ここを訪ねてよかったと心から思った。

ハノイの私と日本の編集者・出版社との間でメールが飛び交い、少しずつ原稿がまとまっていった。

私が付き合いのある残留日本兵家族だけでも数十人、それぞれが違う歴史を背負っている。膨大な情報にしばしばおぼれそうになった。彼らの個人史はベトナム現代史のな

かに位置づけられるものだ。しかし歴史本流を語れるほど、私に専門知識があるわけではない。そんな悩みを旧知の研究者に相談すると、「背景解説を書きましょう」と言ってくださった。しかも、白石昌也先生、古田元夫先生のお二人が、である。残留日本兵のお墓探しに尽力くださった坪井善明先生はその顛末を、テレビマン栗木誠一さんは、自分が制作した二本のドキュメンタリーの臨場感たっぷりな裏話を寄せてくれた。こんな強力な応援団を得て、私がくじけるわけにいかないと奮い立った。

残留日本兵本人や家族が私に託してくれた手記も、資料編として載せることになった。桑原社長からは「もっと書いて、思いの丈をぶつけて」と励ましが届く。打合せのたびに本のページは増え続け、最終的には三〇〇ページを超えた。たったひとりではじめた調査が、たくさんの協力者を経て、本という形になっていった。

本文がほぼまとまり、二〇二〇年の旧正月にめこん事務所で打合せをした直後から、世の中は「新型コロナ」一色になった。ベトナムは対策が早くて制圧したものの鎖国状態になり、ハノイで最後の仕上げを一緒にやろうと約束していた編集者も来られなくなった。校正も表紙のデザインもPC画面で確認するだけ。「紙の本」世代の私にとっては、デジタルな作業は、何とももどかしかった。

本は、ようやく自粛が緩んだ六月に店頭に並んだ、らしい。日本中の書店を見て回りたい気分だが、飛行機が飛ばない。本を手渡して語り合いたい人もたくさんいたが、手紙を入れて出版社から直送してもらった。

出版社が国際郵便で送ってくれた見本の一冊が私の手許に届いたのは、一ヶ月ほどもたってからだった。待ちきれずに、その前に電子書籍版を購入していた。

ベトナムの郵送事情はよくない。特に書籍は検閲もあって長くかかる。だから、これまで本は渡航者のハンドキャリー頼みだった。それもできない今は、過去三十年で最悪の状況だ。長旅の末に到着した「わが子」に、思わず頬ずりをした。

この歴史を知って欲しい人がたくさんいる。活気ある日常を取り戻した暑い暑いハノイの街から、私は、遠い日本の書店棚に並ぶわが子たちに思いを馳せている。

『動きだした時計』
めこん・2,500円

著者インタビュー動画▶
「動きだした時計」
―小松みゆき、ベトナム残留日本兵とその家族を語る―

書標・書評

『感染症社会』

美馬達哉著　人文書院・二〇〇〇円

パンデミック下では余り意味のない国境閉鎖・検疫は、ペストがもたらした「近代社会の理性の起源」であった。

病気への恐怖が病者への恐怖へとすり替わり、健康な人々も社会防衛のために感染症予防と健康増進のための生活習慣を求められ、逸脱者は排除される。ウイルスによる死者数は経済格差や「人種」差に連動する。近代を支えてきたはずの「個人の自由と人権の不可侵性」が、感染予防の大義の前に大きく揺らぐ。COVID-19がもたらした今日の状況は、フーコーが指摘した近代の「生政治」の様態―個人的身体の規律訓練・人口集団の計算と合理性による統治・「人種」による序列化―にピタリと合致する。

インターネット社会の成立は、強制的排除ではなく、マジョリティによる自らの「閉じ込め」への同意・協力を、促進した。「生政治の理想」ともいうべき「自発的な服従に基づいた優しい隔離・検疫の社会」は、アフター・コロナの「新しい生活様式」「ニューノーマル」とされていくのだろうか？　そうなった時、非常事態での例外的措置は日常に組み込まれ、異常は「正常」と言い換えられる。

だが、社会的弱者に配慮する時、「パンデミックの時代に社会距離を取らない生き方の流儀もまた私たちは発明していかねばならない」と美馬は言う。それは、「生政治によって一方的に管理されるたんなる生命へと還元されてしまわない」道である。「経済成長や市場よりも連帯する生を優先する集合的力能」によってその道を辿り始めた時、われわれは、「17世紀以来たどってきたのとは違うもう一つの別の近代を構想する千載一遇のチャンス」を手にするのだ、と。（フ）

『理由のない場所』

イーユン・リー著　河出書房新社・二二〇〇円

大切な人を失ったときに心に空いた穴はそう簡単に塞がるものではない。今後一緒にいられたかもしれない、失われた時間の分、喪失感は大きい。

この物語は、十六歳の息子を自殺という形で亡くした実体験から生み出された。

物語を貫く大きな展開があるわけではなく、死した子と母がどこにも言えない場所（書き手の頭の中にある場所なのだろう）で対話を繰り返す章構成になっている。

生前は話せなかった様々なことについて、時には意見をぶつけ合いながら二人は対話を重ねる。その中で、大事な人の存在があって生まれてきた思いや、人生への悟りのようなものが綴られていく。

「愛することは侵入することだもの。生きることもね」（p.40）

人を愛するということは、相手にとって大事な、ごく個人的な感情にも足を踏み入れていくことだ。そして生きていくということも、自分自身の感情に侵入していくこと。

著者イーユン・リーは途方もなく深い哀しみに、それを言葉にして綴ることによって向き合い、少しずつ受け止めていくことができたのだろう。

新型コロナウイルスの感染拡大により、様々な生活や行動の変化を強いられ、大事な人たちとの接触も困難になっている昨今、今まで以上に自分自身と向き合う時間が長くなっているのではないだろうか。大切な人に限らず、これまでの「当たり前」の喪失と向き合うこの時代だからこそ、自分の感情の居場所を考えてみるべきではな

いか。大切な人のことを考えながら読んでほしい一冊だ。（齊）

『仕事本　わたしたちの緊急事態日記』

左右社編集部編　　左右社・二〇〇〇円

桜が咲き、胸が高鳴るはずの季節に、新型コロナウィルスの感染は拡大してゆく。コロナ一色に染まる報道に不安を抱き、タレントの志村けんが亡くなるという事実にショックを受け、「仕事を続けていて本当に大丈夫なのだろうか」という疑心暗鬼に苛まれている最中の四月七日、政府による緊急事態宣言が発令された。

本書は様々な職業に携わる七十七名が、緊急事態宣言発令後の一か月をどう過ごしたのか日記として記録したアンソロジー。まず、目次のページを開き、その職業の多様さを見てほしい。それはすなわち、コロナ禍において、もはや関わりのない人など誰もいない、ということをよく表している。専業主婦も留学生も馬の調教師も、誰であれ大きな影響を受けているのだ。

いまこの時期に日記を読み進めることは、我々の日常を、生々しい皮膚感覚として、追体験することになる。恐らく、読むことが苦しいと感じる人もいるだろう。「感染リスクを自分の努力だけでは抑えきれない」という不安に苛まれるミニスーパーの店員、感染対策のためにダースベイダーのような恰好でごみを回収するごみ清掃員の日常も、緊急事態宣言が解除された現在でも、何ら変わることがないのだ。

いまだ客観的に検証する時期ではないが、本書の意義はとても大きい。この歴史的転換期を記録として残そうと企画したのは、出版社の大英断である。いつか来る感染の終息後も、価値ある記録となることだろう。（h）

『沖縄米軍基地全史』

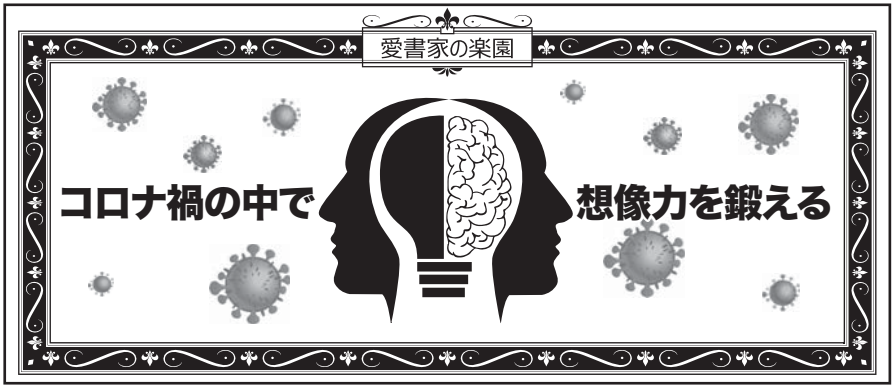
野添文彬著　　吉川弘文館・一七〇〇円

日本における米軍関連施設の七割も占め、基地が県面積の八・二パーセントにも及ぶ沖縄。アジア・太平洋戦争末期から第二次安倍政権までの沖縄における米軍基地の歴史を通観したものである。

日本政府、米国、そして沖縄という三つのアクターと、それを取り巻く冷戦という国際情勢……日本は平和憲法を掲げながらも米軍による東アジアの安全保障体制に加わらざるをえなかったという冷戦構造下の大いなる歪み。その歪みは日米相互に利害と矛盾を抱えながら、終戦から七十五年、そして冷戦終結から四半世紀以上を過ぎた現在も、わたしたち日本人全員の前に解決しなければならない「宿題」として残されている。沖縄の米軍基地の歴史を知ることで浮かび上がってくる戦後の姿。沖縄米軍基地の歴史とは戦後の国際政治の縮図であるということがわかる。

沖縄米軍基地に関する著作はしばしばイデオロギー的な価値判断に基づき、その是非が論ぜられることが多い。本書の著者は一九八四年生まれ。「戦争」とは遠い世代によって描かれた全史である。その叙述は安全保障の観点に軸足を置きながらも、歴史的な背景・事実関係を追っていく筆致はタイトルに「歴史」を戴くのに相応しい。著者の生まれた時代……「戦争」との距離が、そのような価値判断からひとまず離れて、史実としての沖縄米軍基地の歴史を描くことに奏功している感がある。

先の大戦が終結してより七十五年を迎える今夏。どのようにして「宿題」が生み出されて、残されてきたのか。日本人が向き合わなければならない現実。沖縄に屹立する米軍基地が投げかけてくる史実から冷静に見つめたい。（儒）



緊急事態宣言の最中に刊行された『現代思想』五月号（青土社）の「緊急特集感染／パンデミック」は、その冒頭に著名なヨーロッパの哲学者の論考が掲載されていますが、なかでもジョルジョ・アガンベンとジャン＝リュック・ナンシーの意見の相違は興味深いものでした。

『現代思想
2020年5月号』

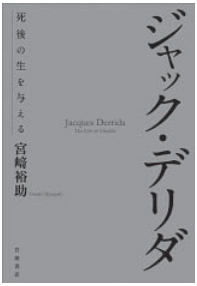
アガンベンは二月二十六日付の論考の中で、今回の新型コロナウイルス感染拡大を抑制するために行われたイタリア政府の緊急措置を「熱に浮かされた、非合理的な、まったくいわれのないものである」と述べたうえで、「例外状態を通常の統治パラダイムとして用いるという傾向はますます強まっているが、まずは、ここでもまたその傾向が現れている」と指摘しています。そして、「例外措置の原因としてのテロは枯渇してしまったが、その代わりにエピデミックの発明が、例外措置をあらゆる限界を超えて拡大する理想的口実を提供できる」と述べました（引用はすべて高桑和巳訳）。

これに対しナンシーは、このアガンベンの論考に応答するかたちで、二月二十七日付の論考において、今回の新型コロナウイルスは「通常の」インフルエンザと違い、それに対する「いかなるワクチンも存在しない」ことを指摘し、「高い致死率を備えている可能性」にも言及しています。その上で、「彼（アガンベン：引用者）が気づいていないのは、あらゆる技術的な相互接続（あらゆる種類の移動や移送、物質の浸透や拡散など）がかつてなく高まり、その強度が人口とともに増大する世界においては、実のところ例外が常態になるということ」をふまえ、「問われているのは、明らかに文明全体なのだ。存在しているのは、生物、情報、文化の面でのウイルス性の例外化のようなものであり、これが私たちを巻き込んでパンデミック化しているのである。政府はこの例外化の哀れな執行者にすぎない」と述べました（引用はすべて伊藤潤一郎訳）。

ヨーロッパにおけるその後の悲惨な展開をみると、ナンシーの指摘のほうが合理的で、パンデミックの要因の一つである「グローバル化」への目配りもきいている気もしますし、アガンベンのほうは自身がこれまでの著作（例えば『例外状態』（上村忠男・中村勝己訳、未來社・二〇〇〇円））で展開した視点にこだわりすぎているようにも思えます。しかし三月に入ってからの論考でアガンベンは、「この国はいまパンデミックによって、死者に対する敬意さえもたない倫理的混乱のなかへと投げ込まれている」こと、そしてイタリア人は「通常の生活のありかたや社会的関係や労働、さらには友人関係や情愛や宗教的・政治的信念」を犠牲にしていることを指摘し、「生き延び以外の価値をもたない社会はどのようなものか?」という、とても重要な問いを発しています。

二人の論考はさらに複数発表されていきますが、ここでは、ナンシーはグローバル化や複雑化する科学技術や経済の展開のもとでの権力の問題とそこでの人間のあり方を問うているのに対し、アガンベンはわたしたちが生きる生の様式ないしは条件により焦点を当てているように思います。ヨーロッパを代表する知性であるこの二人が、危機に際しどのような想像力を働かせて何を問うたのか。ナンシーの『侵入者』（西谷修訳編、以文社・品切）や先に挙げたアガンベン『例外状態』などの著作をふまえて考えてみるのも刺激的なことかもしれません（『侵入者』で詳しく書かれているように、ナンシーはコロナウイルスどころか、心臓移植によって自分の内にまったく違う異物を抱え込んでいるだけに、読者にさまざまなものを喚起してくれると思います）。また、アガンベンの問いは人間の「生と死」の問題を考えることにもつながります。その時、宮﨑裕助さんの力作『ジャック・デリダ　死後の生を与える』（岩波書店・三六〇〇円）が実に有効な視点を提供してくれます。

ナンシー、アガンベン、デリダ、そしてさらに、ハンナ・アレント『人間の条件』（志水速雄訳、ちくま学芸文庫・一五〇〇円）なども加え、その書物を通じて人間が「良く生きる」とはどういうことなのかを改めて考えてみるのも、刺激的な読書経験になるのではないでしょうか。



『ジャック・デリダ
死後の生を与える』

現代日本を代表する哲学者で、ここ最近大きな話題となっている『世界哲学史』（全八巻、ちくま新書）の編集委員のお一人でもある中島隆博先生（東京大学東洋文化研究所教授）は、未来哲学研究所のサイトに、「わたしに触れるな、わたしは触れる」という興味深い論考を書かれています（https://miraitetsugaku.com/page-373を参照）。そこでは、上記でもご紹介したジャン＝リュック・ナンシーの著作『私に触れるな　ノリ・メ・タンゲレ』（荻野厚志訳、未來社・二〇〇〇円）の中の文章を引用しつつ、人との接触が極めて制限されているこのコロナ禍において浮上してきた「身体性」の問題について重要な示唆を与えてくれています。興味のある方はぜひ中島先生の論考を読んでいただければと思いますが、中島先

生が想起された「わたしに触れるな」という、ヨハネの福音書二十章十七節に出てくる、復活したイエスに気づいて近づこうとするマグダラのマリアに対してイエスが発したこの言葉は、この状況下でやはりヨーロッパの知識人の脳裏にもまず浮かんだようです（このナンシーによる書物では、数多くの絵画にもなったこの場面の解釈がさまざまに語られており、キリスト教について学ぶひとつの有益な書物になっています）。

『パンデミック』

その知識人の一人であるスラヴォイ・ジジェクによる新著『パンデミック　世界をゆるがした新型コロナウイルス』（斎藤幸平監修・解説、中林敦子訳、Pヴァイン・一八五〇円）の序章の表題およびその冒頭は「我に触れるな」です。ここではヘーゲルの言葉を引用しつつ、いまだからこそ深く体験できることについて取り上げられています。本書を読み進める中で、個人的に一つハッとする記述がありました。ジジェクの友人で、リオデジャネイロで働いているある精神分析医の言葉です。「今一番不安で、最悪の無気力の幻想に晒されているのは、以前から家で働いていた人たちだ。なぜなら、彼らにとっては、日常生活に現れたこの状況の特異性の境界を、習慣の変化によって定めることができないから」（同書、九十頁）。

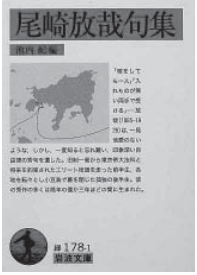
「日常生活に現れたこの状況の特異性の境界を、習慣の変化によって定めることができない」、正直、わたし自身はこの視点を持ち合わせていなかっただけに衝撃でした。これを受けてジジェクはこう述べます。「日々の現実に大きな変化がない場合、コロナウイルスの脅威は亡霊のような幻想として経験される。だからこそよけいに強烈なものになる。ナチス時代のドイツでは、ユダヤ人の数が非常に少ない地方のほうが、反ユダヤ主義が極端であったことが思い出される。見えないことがユダヤ人を恐ろしい亡霊にしてしまったのだ」（同書、九十―九十一頁）。これに続く議論もとても興味深いものになっています。そして、こうした哲学者の著作とパオロ・ジョルダーノ『コロナの時代の僕ら』（飯田亮介訳、早川書房・一三〇〇円）とをぜひ読み比べてみてください。素粒子物理学のバックグラウンドを持つ作家の想像力と哲学者たちの想像力、読者の皆さまはどうお感じになるでしょうか。

『コロナの時代の僕ら』

ちょっと哲学的な議論に偏ってしまったので、視点を変えてみましょう。

多くの大学で講義がオンラインになり、それがまだしばらくは続きそうな状況です。今年入学した大学一年生は、未だほとんどの人が同級生と直接会うこともなく、また、東京や大阪、京都などの都市に住むはずが、実家の部屋で一人静かにパソコンの画面と向き合いながら、

毎日オンライン講義を聴き続ける、という状況になっているかもしれません。孤独をひしひしと感じている人も多いでしょう。そんなとき、書物によって、その孤独がもつ多様性を想像してみるのも意味があるのではないかと思います。



『尾崎放哉句集』

ここでは二つの書物を挙げてみましょう。一つは『尾崎放哉句集』（池内紀編、岩波文庫・五四〇円）、もう一つはルソーの『孤独な散歩者の夢想』（青柳瑞穂訳、新潮文庫・四九〇円）です。明治後半の超エリートであった尾崎は、さまざまな挫折を経て、晩年は病を抱えつつ地方のお寺でお守り役をつとめます。孤独で、かつ死と隣り合わせの生活の中で詠まれた句には、有名な「咳をしても一人」のように、「一人」とか「一つ」という言葉が目立ちます。なんとも切ないのですが、この尾崎の句作を見守り続けた荻原井泉水という人がいました。彼によって尾崎の句がこれだけ残ったといってもいいでしょう（このあたりの経緯は池内紀先生の解説をぜひお読みください）。一人でいても誰かに見守られていることが、われわれを揺さぶる言葉を残すことにつながったのかもしれません。ルソー晩年の著作『孤独な散歩者の夢想』は、おそらく尾崎よりももっと深い絶望の淵に立たされたであろう時にルソーが問うたものが展開されています。ルソーの人生はある種ハチャメチャではありますが、その彼が最後に孤独のなかでつかまえようとしたものは何か。そのことを散歩しながら想像するのは悪くないと思います。

新型コロナウイルスの感染が拡大するにつれて、テレビの報道などでは毎日、新たな感染者の数が報告され、わたしたちはそれに対し、危機感を募らせたり少し安堵したりを繰り返してきました。三月中旬から感染者の数字が大きくなった結果、自粛要請、緊急事態宣言へと進んでいったのですが、その間、「ステイ・ホーム」や「いのちを守る」といった言葉を中心に、なんとも一様な文句ばかりが世に流れました。個人的には、もう三十年も前の、昭和天皇が亡くなる前にくり返された病状報告と自粛の拡大が思い出され、なんとも気が滅入るものでした。日々耳にする言葉が一様になる状況は、落ち着かなく気分が塞ぐものです。そんな感覚を持っていらっしゃる方も多いのではないでしょうか。そんなときは意識的に言葉を回復させねばなりません。そのための最良の薬は、詩であり良質の小説です。ここでは極めて私的ではありますが、わたしにとってのこの間の「良薬」をいくつか挙げておきたいと思います。

『美しいからだよ』

水沢なおさんの詩集『美しいからだよ』（思潮社・二〇〇〇円）と野村喜和夫訳著『ルネ・シャール詩集　評伝を添えて』

（河出書房新社・二九〇〇円）の二冊をまず挙げておきます。前者は、中原中也賞も受賞された若手の詩人による初の詩集です。この詩集によってわたし自身の詩のイメージも大きく揺さぶられましたし、物語を想像させる言葉の展開に、詩を読んでいるのか小説を読んでいるのか、とても不思議な感覚になりました。水沢なおさんの今後は大注目です。後者はシュルレアリスムにも大きく関わったシャールの詩が多数掲載され、かつ野村喜和夫さんによる評伝が組み合わさっているという、なんとも贅沢な書物です。その中で飛び交う言葉も実に多彩でまったく読み飽きません。

『ポラリスが降り注ぐ夜』

小説では多和田葉子さんの『地球にちりばめられて』（講談社・一七〇〇円）を挙げておきましょう。言葉のリハビリには最適な一冊です。また、現在も進行中のコロナ禍によって、わたしたちは多くの大切なものを失っている、あるいはそこに触れられない状況におかれています。李琴峰さんの『ポラリスが降り注ぐ夜』（筑摩書房・一六〇〇円）は、その失っているもの／いまは触れられないものを呼び起こしてくれます。わたしもこの間、本書の中の七つの物語をランダムにくり返し味わい、ある種の想像力を失わないようにしてきました。

『日常非常、迷宮の時代 1970―1995』

多くの方々が指摘しているように、このコロナ禍は、すでに問題となっていた既知の課題にわれわれがほとんど手をつけていなかったことを明確にしました。格差・貧困の問題然り、民主主義のあり方や政治的意志決定の問題然り、です。八月に展開される愛書家の楽園フェアではそれらに関連する書籍も挙げていますので、ぜひ店頭で手に取っていただければ幸いです。ここでは最後に、「想像力の塊」で、しかもそれを「行為する人」である、尊敬する小林康夫先生の新著『日常非常、迷宮の時代 1970―1995：オペラ戦後文化論2』（未來社・二八〇〇円）を挙げておきたいと思います。本書の一場、一場で描かれる、他者との出会い、歴史、ドラマ、重ねられる言葉、そしてなんといっても豊かな想像力。「行為する人」小林先生の魅力を存分に味わっていただければと思います。いまは我慢もしなければなりませんが、本書を読むと、きっと動きたくなるはずです。そんな日常かつ刺激的な非常の日々が早く戻ってくるといいですね。

（東京大学出版会・黒田）

＊愛書家の楽園・特集「コロナ禍の中で想像力を鍛える」でご紹介した書籍は、ジュンク堂書店池袋本店一階エレベータ前と福岡店三階、丸善名古屋本店一階と京都本店地下二階にて、八月十日～九月九日までフェア展開中です。

コロナウイルス以降、わたしたちの生活は随分変化しました。自宅にいることが多くなり、本と向き合う時間が以前より増えた方もいらっしゃるのではないでしょうか。ネガティブになりがちな今だからこそ、新しいことを始めませんか？最初の一冊にぴったりの書籍を選びました。（ジュンク堂書店吉祥寺店）

『プラスチック・フリー生活』

『プラスチック・フリー生活』（NHK出版・シャンタル・プラモンドン、ジェイ・シンハ著・二〇〇〇円）

プラスチック製買い物袋の有料化が七月からスタートして、プラスチックが自然へ及ぼす影響を考える、良いきっかけになったのではないでしょうか。本書は個人消費におけるプラスチックゴミをいかに削減できるか、出されたゴミがどのようにリサイクルされていくのかを分かりやすく解説。私たちが思っている以上にリサイクルは進んでおらず、目先の数字だけでは判断できない現実に直面していることが分かります。できる範囲からのプラスチック・フリー生活、まずはエコバッグから始めてみませんか。（宮田）

『ミツバチと暮らす』

『ミツバチと暮らす』（無明舎出版・藤原誠太著・一七〇〇円）

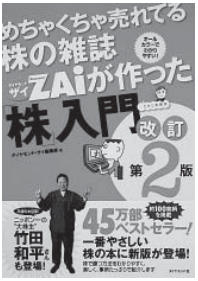
養蜂と聞くと敷居が高いように思えますが、その入り口は思いのほか広く、その気になれば都会でもミツバチを飼うことができるのです。飼育に必要な道具から育成方法、蜂蜜の採取法、販売に至るまで、わかりやすく、経験者の体験談を含めて解説してあります。ミツバチの一生を知り、養蜂を行うことによって周辺環境に与える良い影響など、蜂蜜のありがたさがよくわかる一冊です。自家製蜂

蜜のハニートースト……考えただけでヨダレが（笑）　（宮田）

『ビジネスにも役立つ！YouTube完全マニュアル』

『ビジネスにも役立つ！ＹｏｕＴｕｂｅ完全マニュアル』
（秀和システム・桑名由美著・一三八〇円）

動画を見ることが日常になりつつある昨今、視聴するだけでなく発信する側へも注目が集まっています。個人的な趣味での記録をはじめ、経営者から見た広告媒体としても評価が高まっています。最近テレビは見ないがＹｏｕＴｕｂｅは見るという若年層も増えていて、ネット広告としての重要性がますます注目されているのです。ただ外部に依頼するとコストがかかり、その費用対効果が見込めるのかも怪しいものだし、個人で始めるにはどうしたらよいかわからないことばかり。本書にはＹｏｕＴｕｂｅの視聴方法から編集方法、動画投稿の注意点に至るまで詳しく解説されていて、ＹｏｕＴｕｂｅ初心者には心強い一冊となることでしょう。　（宮田）



『めちゃくちゃ売れてる株の雑誌ＺａｉがＺａｉが作った「株」入門』

『めちゃくちゃ売れてる株の雑誌ＺａｉＺａｉが作った「株」入門』
（ダイヤモンド社・一六〇〇円）

資産を増やしたい……と思ってはいても、なかなか手を出せない世界「株」！かなりライトなタイトルですが、中身はとても分かり易く、楽しく学べると評判の一冊。特に事例が多く紹介されているため、選び方からテクニックまで、「勝つ」道筋がスッと見えてきます。スマホで、小額から等、株への入り口は以前に比べてとても広くなってきています。勉強時間が取りやすい今こそ、株の扉を開いてみてはいかがでしょうか。　（田村）

『高校生からの法学入門』

『高校生からの法学入門』
（中央大学出版部・九〇〇円）

難しいもの、と思いがちな法律ですが、普段意識していないだけで、実はとても身近で奥深いものです。中央大学法学部の九人の教授が、部門ごとにそれぞれ事例をあげて解説している本書は、法律の勉強のみならず、新しく、多角的な考え方も身に付けることができます。

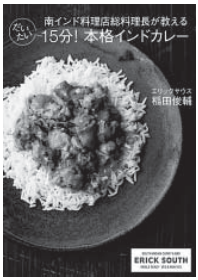
昨今問題提起される事の多いＳＮＳやブラック企業など、耳に馴染みのある問題から学べるので、十代だけでなく、幅広い年齢層の方に手に取って頂きたい一冊です。　（田村）

『南インド料理店総料理長が教える
だいたい15分！本格インドカレー』
（柴田書店・稲田俊輔著・一六〇〇円）

スパイスカレーが定着してきて、自宅で作れるようレシピ本も出版されるようになりましたが、スパイスから作る事に難しさを感じる方もいるはず。それを解消してくれるのが本書です。

タイトルに「だいたい十五分」とありますが、仕事から帰ってカレーを作るとどうしても時間がかかるところが、こちらのレシピ通りに作ってみると短時間で作れました。この、パパッと作れる感覚が嬉しくて、多くの人に体験してほしいのです。写真でわかりやすく調理の流れが説明されていて、缶詰やスーパーで揃う食材で作れます。じっくり時間をかけて作る休日用のレシピもあるので、使い分けてスパイスカレーの世界を楽しんでいただきたい一冊です。

（中崎）



『だいたい 15 分！
本格インドカレー』

『書いて、捨てる！』

『書いて、捨てる！』
（大和出版・筆子著・一四〇〇円）

日々生活していると、「忙しくて目の前のことをやるだけで精一杯」「部屋が片付かない」「衝動買いが止められない」等様々な悩みがあり、なかなか解決しないまま過ごしている人も多いと思います。

その状態を「書くこと」で解決しましょう。著者の筆子さんは、持たない暮しの良さをブログで発信されている方です。紙に書くことで整理ができて、内容に意識が向き、自分の考えや行動パターンに気付くことができます。紙とペンはどこの家にもあるもので、すぐに始められるでしょう。自分の悪い習慣を変えるきっかけ作りに、まず手に持っているスマホを置いてみませんか。

（中崎）

『桂枝雀のらくご案内―
枝雀と 61 人の仲間』

『桂枝雀のらくご案内――枝雀と61人の仲間』
（ちくま文庫・桂枝雀著・八〇〇円）

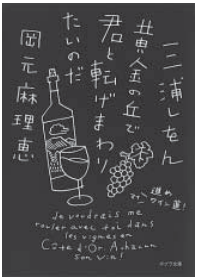
二代目枝雀による持ちネタ厳選六十席の落語のあらすじと、その落語にちなんだエッセイ集。

「古典落語」はとっつきにくい？　いえいえ、そんなことはありません。噺の聞きどころ・聞かせどころ、登場人物の魅力や、何気ない一言が描き出す噺の舞台などにも触れてくれているので、これまで古典落語にあまり触れることがなかった人でも十分に楽しめる一冊です。楽屋の裏話や思い出話を交えながら、古典落語に触れることができて、読み終えるころには落語と枝雀の虜になっているでしょう。

（岡安）

『黄金の丘で君と転げまわりたいのだ』（ポプラ文庫・三浦しをん、岡元麻理恵著・七四〇円）

お酒は好きだけどワインはよくわからない……でもちゃんと勉強するにはハードルが高いなあ。ワインって難しそうだし、レッスンなんて堅苦しいし。そんな方にお勧めなのがこの本。ワインについての本ですが、マニアックな本ではありません。ワイン素人の酒好き達が、ワインの専門家に入門。勉強会という名の飲み会で、一緒に楽しくレッスンしましょう。自分好みのワインを求める、面白くて役に立つ一冊です。（岡安）



『黄金の丘で君と転げまわりたいのだ』

『感情類語辞典』（フィルムアート社・アンジェラ・アッカーマン著・二〇〇〇円）

（⇒シリーズ『トラウマ類語辞典』（二二〇〇円）『場面設定類語辞典』（三〇〇〇円）『性格類語辞典ポジティブ編』（一三〇〇円）『ネガティブ編』（一三〇〇円））

『感情類語辞典』

『場面設定類語辞典』

小説を書きたい。物語のプロットも決まり、いざ書こうとすると手が止まってしまう事はありませんか？　そんな方にお勧めしたいのが類語辞典シリーズです。一冊でも充分に事足りますが、全五冊を揃えてしまえばあっという間に書き終えてしまいそうなほど、どんな人物がどういった行動を取るのかが明確に描かれている、いわば物語の辞書なのです。登場人物の設定が薄い、状況を説明したいのに言葉が足りない、そんな悩みもこの辞典が解決してくれるでしょう。（齋藤）

『五七五で毎日が変わる！　俳句入門』

「五七五で毎日が変わる！　俳句入門」（朝日新聞出版・堀本裕樹著・一三〇〇円）

夕暮れ、虫の鳴き声、伸びる影、これらの情景をエモいの一言で片付けてしまうのはとても勿体ないと思いませんか？

在りし日の　伸びゆく影と　黄金色

そうです。俳句にすればもっとエモいのです。興味はあるけど勉強が苦手な方、問題ありません。本書では吟行と漫画を通して、俳句の基本を学ぶことができます。登場人物の話も面白いので、俳句を全く知らない方でも楽しめる、とってお

きの入門書になっています。（齋藤）

『ぜんぶわかる
人体解剖図』

『ぜんぶわかる人体解剖図』
（成美堂出版・坂井建雄、橋本尚詞著・一九〇〇円）

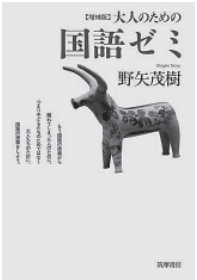
ステイホームが続いたこの春は、カラダが鈍ってしまった、少々食べ過ぎた、という方が多いのではないでしょうか。そんなときだからこそ、普段はあまりカラダの内部など気にしたことがないけれど、ヒトのカラダについて考えてみるのも良いかもしれません。

医療従事者のみならず、一般の方にもわかりやすく、ルビもふられているため、子どもにも読みやすい。肝臓って？腎臓って？と知らなかったヒトのカラダの内部を詳しく知ることができる一冊です。（金子）

『「座りすぎ」ケア
完全マニュアル』

『ケリー・スターレット式「座りすぎ」ケア完全マニュアル』
（医道の日本社・三六〇〇円）

オリンピック選手などのトレーナーを務める、アメリカの人気理学療法士、ケリー・スタートレット。本書では、長時間のデスクワークが身体へ及ぼす悪影響を「座ることは新しい喫煙である」と指摘しています。日本を含めた世界中の国々で、コロナウイルスの影響により在宅ワークへ移行する企業が増えるなか、デスクワークの際に正しい姿勢で座る方法から、ストレッチの仕方、三十分毎に二分間身体を動かす必要性があることなど、健康のために必要な知識を体系的に学べます。一般の方だけではなく、在宅ワーク移行を考える企業の方々にもおすすめしたい一冊です。（渡辺）



『増補版
大人のための国語ゼミ』

『増補版　大人のための国語ゼミ』
（筑摩書房・野矢茂樹著・一八〇〇円）

国語は小学校から高校、人によっては大学まで授業で習うものだから、今更国語を勉強する必要はない。と思う人も多いかもしれません。しかし日常の会話や仕事の一場面で、要領を得ない受け答えをしてしまった、もう少しうまく伝えられたら、と思う事も少なからずあるのではないでしょうか。そんな大人たちのために、本書では問題をじっくり考えながら読み進めることで、今一度国語力を鍛えなおす手助けをしてくれます。難しいだけではなく楽しく読み進められるよう工夫もされているため、一度腰を据えて国語を学びなおしたいと考えている人には、是非この国語ゼミに参加することをお勧めします。（大滝）

『妖怪草紙
くずし字入門』

『妖怪草紙　くずし字入門』
（柏書房・アダム・カバット著・二三〇〇円）

同じ日本で使われていた文字なのに、今では書道関係者や歴史研究家しか読むことが出来ないであろう、くずし字。大河ドラマで描かれる書簡を読んでみたいなどと興味はあっても勉強するには難しそうで、なかなか手を出しにくいのではないでしょうか。

本書は、江戸時代に刊行された子ども向けの絵入り本「草双紙」の中から妖怪を主題にした作品を用いて、くずし字の基本的な文字を段階的に習得できるユニークな入門書。妖怪の絵を見て何が書かれているのかを想像し、答え合わせのように学ぶことができるので、初めてくずし字を学ぶ人にもおすすめです。（大滝）

『英語日記ＢＯＹ
海外で夢を叶える英語勉強法』

『英語日記ＢＯＹ　海外で夢を叶える英語勉強法』
（左右社・新井リオ著・一七〇〇円）

「英語　独学」でのＧｏｏｇｌｅ検索で、約二年間にわたり第一位を記録した、新井リオの英語勉強法。十九歳から独学で英語とデザインを学び始めた彼の基本は、お金がなくても英語は身につく！ということ。読書が苦手な方にもパッと重要点が分かるよう、読者に寄り添う事を第一にとても工夫された内容となっています。今の時代ならではの学習法は、新しくとても画期的。英語学習へ二の足を踏んでいる方に、勉強は楽しいと教えてくれる前向きな一冊です。　（田村）

『あいうえお
フォニックス』

『あいうえおフォニックス』
（ＫＡＤＯＫＡＷＡ・スーパーファジー著・一六〇〇円）

発音記号と戦い、習得してきた世代の方には、聞いたことはあるけれどなかなか馴染みがないフォニックス。綴りと発音を結び付けるルールを学習するこのメソッドは、ネイティブでは主流の学習方法です。英語学習者が苦戦する発音も、フォニックスで学びなおす事により、リスニングやリーディングまでもがスムーズに行えるようになります。ＹｏｕＴｕｂｅとの連動で動画を見ながら学習できるので、諦めてしまった英語をやりなおしたい方はもちろんのこと、親子一緒に学ぶ際にもおすすめです。　（田村）

『ゼロから学ぶプロの技
神技作画』

『ゼロから学ぶプロの技　神技作画』（KADOKAWA・toshi著・一五〇〇円）

イラスト描けたら良いなあ、と思う方は多くとも、なにから手を付けたらいいのか分からない、が一番にくるのではないでしょうか。そんな方に特におすすめしたい本書、なんとなぞり書きできる練習帳がついているのです。線の引き方を覚えるために、トレースは大変効果的。初心者が躓きがちな問題もQ&A形式で丁寧に解説し、基礎から応用までこの一冊で「神技」を学ぶことができます。夢を叶える第一歩、踏み出してみてはいかがでしょうか。（田村）

『木枠の織り機で
手織りこもの』

『木枠の織り機で手織りこもの』（誠文堂新光社・ichi.co著・一五〇〇円）

機を織る、という作業は普段の生活では触れることが少ないのに、なぜか懐かしく感じられませんか？　興味があっても、織物の教室に通ったり、旅行先で体験するのがなかなか難しいなら、お家で始めてみればいいのです。

小さなテーブルにも置けるくらいの木枠の織り機で、びっくりするほど簡単に小物をつくることができます。この本で使っている織り機も数千円で購入できる簡易なものなので取り扱いもしやすく、毛糸も好きなものを用意すれば大丈夫。縦糸に横糸をくぐらせ、くしで打ち込む、その単純で無心な作業の繰り返しに、心が休まっていく気持ちになれます。（大内）

『ハンドレタリング・ワークブック101』（翔泳社・CHALKFULLOFLOVE著・一四八〇円）

自筆で文字を書く機会が減り、履歴書でさえタイプすることが珍しくなくなった昨今ですが、それに反してペン字の本の需要は必ずあり、カリグラフィーやハンドレタリングと言った装飾文字の本も続々刊行されています。どの本にも美しくかわいい文字がたくさん載っており、手紙や手帳など日常にも使えるものばかり。しかし、いきなり同じように書くのはなかなか難しいもの。そもそも筆記体すらもう何年も書いてない……という方にもお薦めなのがこの本です。なぞり書きしながら練習できるから、なんといってもコツが掴みやすい。著者はアメリカでレタリングのワークショップを開いており、翻訳本ではありますが、紹介されているペンは日本のメーカーのものもあるので参考になります。気軽に始めたい、けど挫折したくない、そんなわがままも叶えてくれるこの一冊で、始めてみませんか？（大内）

今月のおすすめ

社会科学

危険人物をリーダーに選ばないためにできること

ビル・エディ著　宮崎　朔訳

二〇一六年のアメリカ大統領選ではドナルド・トランプが勝利した。著者は彼のような対立を煽る政治家たちは人々の感情を揺り動かし、コミュニティを分断して対立させ、その結果権力の座に就くと分析する。

彼らは人々のネガティブな感情を揺り動かすために架空の危機とその原因となる悪者を作り出し、自らを救世主とする。

本書ではそんな危険人物に権力を与えないために、ポジティブな関係を作り、論理的に行動することの重要性を説く。

プレジデント社　二〇〇〇円

デジタル×地方が牽引する 2030年日本の針路

江川昌史・藤井篤之著

今日、地方創生をテーマにした書籍は少なくないが、本書はデジタル技術の視点から語られているのが特色だ。

東京一極集中による弊害の是正と、地方社会活性化を進めることがＱｏＬ（社会全体の生活の質、人生の質）を高めると説き、その手段としてデジタル技術に着目。実社会への応用事例を多数提示している。実際、新型コロナの影響によりリモート対応が急速に進んだことで、地方の不便性は軽減されつつある。これぞポストコロナ時代に則った地方啓発本である。

日経ＢＰ　一六〇〇円

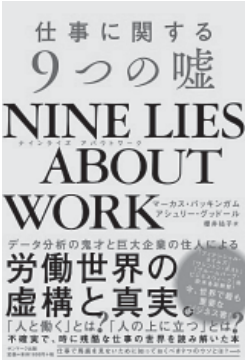
仕事に関する9つの嘘

マーカス・バッキンガム、アシュリー・グッドール著

著者のマーカス・バッキンガム氏は『さあ、才能に目覚めよう』（日本経済新聞出版社）などの著者として知られ、アシュリー・グッドール氏はシスコの人材活用支援の実務家である。

本書はハーバード・ビジネス・レビューの依頼で、仕事に関する九つの常識や慣行が嘘であることを証明していく。例えば、ウソ＃1では「『どの会社』で働くかが大事」をテーマに、実際は会社ではなく、所属するチームが大事というように結論を導き出している。自分の目の前の仕事に向き合うための一冊。

サンマーク出版　一八〇〇円



巣ごもり消費マーケティング

竹内謙礼著

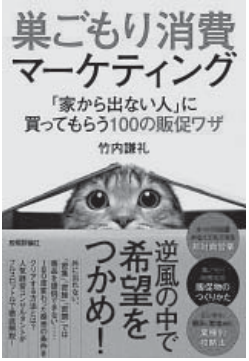
著者は、有限会社いろは代表取締役で、著書には『ネットで儲ける王様のカラクリ』など多数。新型コロナによる集客減、景気低迷、キャッシュ消滅の三重苦をどうクリアするかを徹底解説する。戦略は短期、中期、長期と三つのフェーズで考えると良いとしている。

この先成長が期待できる商材としては、在宅学習、家庭菜園、移動販売などを取り上げており、一番厳しい状況である飲食店やスポーツジム等に対しても

ネットの活用法や販促物の作り方など具体的な対策を細かに提案している。

新型コロナの収束がまだ見えない中、多くのビジネスマンの救いとなるアイデアが多数紹介されている。

技術評論社　一六八〇円



未来IT図解 これからのDX〈デジタルトランスフォーメーション〉

内山悟志著

アフターコロナのキーワードとして注目度が高まるDX。しかしいざ取り組むとなると、「IT化」とどう違うのかすら分からないなんてこともあるのではないだろうか。

本書はDXの事例とその仕組みを分かりやすく解説している。さらに、DXを進める具体的な手順まで説明しており、入門から実践までカバーする良書と言える。

DXに不可欠な意識変革のためにも、社内関係者全員で読みたい一冊である。

エムディエヌコーポレーション　一五〇〇円

人生に必要な教養は中学校教科書ですべて身につく

池上　彰・佐藤　優著

学校の教科書といえばつまらない勉強の象徴のように記憶している方は多いだろう。しかし知の巨人として著名な著者二人は、今の中学校教科書は社会を生き抜くための教養がしっかりと身につくようになっていると太鼓判を押す。時代に合わせてアップデートがなされていたり、これやって何の役に立つの？に応えるべく各科目とも工夫がこらされたり、いま一度教科書を読んでみたくなること請け合いである。

ちなみに検定教科書は一般の方でも教科書供給所などで購入可能。一般書店で扱えるところは限られているので、ご注意ください。

中央公論新社　一四〇〇円

「許せない」がやめられない SNSで蔓延する「#怒りの快楽」依存症

坂爪真吾著

なぜSNSではこれほど頻繁に炎上が起きるのか――依存症という視点からその真相に迫るのが本書である。

理解しづらいかもしれないが、炎上を引き起こす人は「怒りたい」のだという。彼らは当事者ではないにもかかわらず被害者というポジションに立ち、「加害者」の無自覚を糾弾する。そしてバズったときの快感は、このポジション（最強の弱者）から降りることを困難にしてしまう。著者は最後に、彼らへの医療・福祉的支援を訴えている。

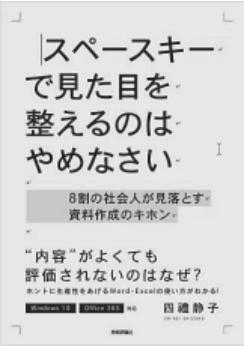
徳間書店　一七〇〇円

今月のおすすめ

コンピュータ

スペースキーで見た目を整えるのはやめなさい

四禮静子著　発売直後の紹介ツイートに、十万件もの「いいね」がついた本書。ついついタイトルの行為をしてしまっている人が、いかに多いかということだろう。スペースキーの多用は文字の微妙な不揃いを生み、文章を修正する際にレイアウトが崩れてしまう原因ともなる。Wordは段落、Excelはセルの仕組みをきちんと理解して作成・編集することで、ビジネス資料はグッと見やすく、美しくなる。　技術評論社　一六八〇円



行動を変えるデザイン

Stephen Wendel著
武山政直監訳　相島雅樹他訳

運動習慣をサポートしてくれるスマートウォッチに、食事内容を入力すると栄養士のアドバイスが届くアプリ。このようにユーザーの行動を継続的に改善してくれるプロダクトを設計するのが、本書が解説する行動変容デザインだ。心理学や行動経済学、さらにはインタフェースデザインなど、異なる領域の知見が交差するところが行動変容デザインの真髄。

オライリー・ジャパン　三四〇〇円

More Effective Agile

Steve McConnell著　長沢智治監訳

全世界百万部以上の売上を誇るソフトウェア開発のベストセラー『Code Complete』（同社・上下各六一〇〇円）。その著者が十五年ぶりの新刊で取り上げるテーマは、アジャイル開発。「うまくいくことが実証されているプラクティス」に焦点を当てているのが特徴で、なんちゃってアジャイルにならないための、実践的な内容となっている。

日経ＢＰ　二七〇〇円

オブジェクト指向Ｕーデザイン

ソシオメディア株式会社他著

オブジェクト指向といえばソフトウェア開発を思い浮かべるが、ＵＩデザインへの適用にも関心が高まっている。オブジェクト（操作する対象物）を起点に設計することで、タスク（やること）指向よりも画面数を減らすことができる。結果として開発の工数は減り、ユーザーの作業効率は上がる。十八の実践例を通して、オブジェクト指向ＵＩを学んでいく。

技術評論社　二九八〇円

万物創生をはじめよう

ジャロン・ラニアー著　谷垣暁美訳

「バーチャル・リアリティ」という言葉の生みの親にして、「ＶＲの父」と呼ばれる著者の、自伝的回想録。夢想癖のある少年がコンピュータグラフィックスと出会ってエンジニアとなり、仲間たちとＶＲギアの制作販売会社を立ち上げるまで。一癖も二癖もある天才たちがシリコンバレーに引き寄せられるように集まり、まだこの世にないモノを生み出そうとする様は、一本の映画を見ているようだ。

みすず書房　三六〇〇円

今月のおすすめ　自然科学

モヤモヤそうだんクリニック

池谷裕二／文
ヨシタケシンスケ／絵

それぞれに著書の多い両氏がタッグを組んだ。二五六名の小学生からよせられた、日々の疑問や悩みを解決するためのヒント集だ。「頭のよくなる薬はあるのか」といった可愛いものもあれば、「学校のルールに納得がいかない」「自分に自信がもてない」「なぜいじめはなくならないのか」といった深いものも多い。どれも難しい問題だが、平易な文章と楽しいイラストで回答されている。海馬の働きやセロトニンの効果なども書かれているが、専門用語にはかみ砕いた説明を添えてあり漢字にはルビもふってある。例えば「やる気のスイッチはどこにあるんでしょう」という質問に対しては、運動野を刺激して淡蒼球を活性化するという具体的なメカニズムを、小学生が読んでもわかる言葉で、スイッチを入れるための体操まで併せて説いている。児童書の皮をかぶった脳科学の本だ。

NHK出版　一二〇〇円

生き物の死にざま
はかない命の物語

稲垣栄洋著　前作『生き物の死にざま』（草思社・一四〇〇円）は様々な動物たちの個性ある死にざまを描き、ベストセラーとなった。本書はその姉妹編である。

今回登場する生き物たちもみなドラマチックな生態を持っているのだが、全てがその死にざまに現れているようで、涙なくしては読めない生物学書となっている。特に、植物を専門とする著者の真髄が現れている最終章、「生と死」をまとって生きる樹木の人生には誰もが驚かされることだろう。

草思社　一四〇〇円

発酵学の革命
マイヤーホッフと酒の旅

木村　光著

本書は、解糖系代謝経路の解明者として知られている、ドイツ系ユダヤ人の生化学者オットー・マイヤーホッフの発酵研究史と、マイヤーホッフを知る人物及び酒を含めた食文化をめぐる旅の記録である。昨今の健康増進キャンペーンやコロナ禍において、微生物学のリテラシーが求められている今日、アルコール発酵のメカニズムを解明し、「生物学の斉一性」を知らしめたマイヤーホッフの研究は、より広く知られて然るべきである。「乳酸学説」から一歩進んで、発酵や解糖のエネルギー源をリン酸化合物類に見出した過程も平明に描かれていて、パスツールの名を知らぬ者でも、微生物学を容易に「わかったつもり」にしてくれて心地よい。それは、食文化をめぐる旅の記録によって、マイヤーホッフの生きた時代と現代の生活との連関を、ありありと感じさせる著者の采配がなすわざである。

京都大学学術出版会　一八〇〇円

今月のおすすめ　医学書

つむじまがりの神経科学講義

小倉明彦著

神経科学は、脳や神経のしくみを細胞・分子レベルで解明する学問で、人間の学習や行動などの科学的な理解を目的としている。この、一般的にはとっつきにくいとされる分野の第一人者である著者が、大学からの退職を機に、自身の研究テーマ「記憶のしくみ」について認知症や記憶障害などを通し、定説ばかりでなく、自説をのびのびと語る。神経や脳の合理性や不可思議さに満ちた一冊で、更に、四方山話が所々にテンポ良く挟まれ、娯楽性をも備えている。

晶文社　一八〇〇円

薬剤師のためのナレッジベース

石井伊都子監修　鈴木貴明編

ナレッジベースとは単なる知識ではなく、組織で蓄積できる知識、経験、事例など、付加価値のある体系的な情報のことを指す。現在、医療用医薬品の品目は約一万六千種にのぼり、それも多領域にわたっているため、自己学習の限界を超えている。本書の役割はそのカバーであり、極めて機能性が重視された一冊となっている。五十以上の疾患分のガイドラインに基づく医薬品の基本情報が網羅されており、服薬指導や薬剤師業務へのサポートとして強い味方となるだろう。

じほう　五〇〇〇円

ケアとまちづくり、ときどきアート

西　智弘・守本陽一・藤岡聡子著

駄菓子屋を併設する介護施設、まちなかで屋台を押す医師など、今「ケアとまちづくり」ブームがきている。この書籍は、地域に医療福祉関係者が出ていくことの意義を考え直し、地域に出ていくにあたって何を心がければいいのか、どこにつまずきやすいポイントがあるのかなど、その手助けとなってくれるだろう。まちの中に医療福祉関係者が普通に「いる」未来を望んでいる著者の願いが込められた一冊。

中外医学社　三四〇〇円

デザインから考える障害者福祉

ミシンと砂時計

海老田大五朗著

障害者福祉関係の専門家はもちろん、いままで全く関わったことのない人たちにこそ読んで欲しいと著者は述べている。自分たちだけに都合のいいように作られたこの社会に、障害者との協働のなかでできあがった実践のデザインを組み込んでいくにはどうすればいいか。論文を元とした学術研究的内容ではあるが、一般の人が読んでもなるほど、と気付かされる点が多々ある。偶然か必然か、本書の出版元であるラグーナ出版自体が障害者福祉のデザインに満ちた会社であり、その一部の労働時間に関するデザインが本書で取り上げられている。

ラグーナ出版　一八〇〇円

今月のおすすめ　人文科学

歴史家と少女殺人事件
レティシアの物語

イヴァン・ジャブロンカ著　真野倫平訳

フランスで複数の文学賞を取り、ドラマ化もされたノンフィクションだが、実は気鋭の歴史家による歴史叙述の新しい試みでもある。いわゆる三面記事的な事件を扱いながらも、その重層的な筆致は犯罪者を主役にするのではなく、あくまでも被害者のレティシアと、事件を取り巻く社会を共に分析していく「歴史ドキュメンタリー」なのである。

名古屋大学出版会　三六〇〇円

肉食の哲学

ドミニク・レステル著　大辻　都訳

ベジタリアンやビーガンなどの食に対する思想を通じて、人間を中心におく西洋の伝統文化に異を唱える本書。動物行動学者の著者によると、あくまで人間は命の交換を前提とする生態系のなかで生きる生物の一種であり、肉食こそが人間がとるべき倫理学的態度なのだと言う。

動物の倫理を考える上でもおすすめの一冊。

左右社　二二〇〇円

旧約聖書の政治史
預言者たちの過酷なサバイバル

古田博司著

本書は、社会科学から旧約聖書を読み解くというユニークな一冊。著者は社会学者であり歴史学者でもあるがゆえに、内容は多岐にわたり、知的好奇心を大いに刺激される。とはいえ文章は平易に書かれているので、聖書を繙いたことがなくても充分たのしめる。

著者自身が本書を小説のように読んでほしいと言っているように、旧約＝文学としての側面も備えた一冊といえよう。

春秋社　二七〇〇円

セルフケアの道具箱
ストレスと上手につきあう100のワーク

伊藤絵美著

ストレス社会と呼ばれる現代。しかしそれはコロナによる不安、自粛疲れなどにより急速に高まっている。

ストレスからの回復とは、元気になることではなく、自分で自分を上手く助けられるようになることだと著者は言う。では、その方法は。本書はケアの仕方を解説し、実際に取り組むワークブックとなっている。現代人には必須の一冊。

晶文社　一六〇〇円

赤ちゃんポストの真実

森本修代著

赤ちゃんポストのニュースを初めて耳にしたとき、赤ちゃんを捨てられる場所があるということにとても驚いた記憶がある。大学の福祉の講義で赤ちゃんポストの是非を問われたこともあった。しかしそう簡単に是非を述べられる問題ではない。そのことをこの本を読んで知った。

命を救うという理念のもと、赤ちゃんポストが開設されて十三年。この制度に関わり尽力している人たち、自分の子どもをこのポストの預けた親たちは、今何を思っているのだろうか。赤ちゃんポストから日本社会が見えてくる。

小学館　一五〇〇円

今月のおすすめ

文学・文芸

うたうおばけ

くどうれいん

くどうさんは東北に住む歌人。歌人のひとのエッセイってどんなのかしら、と思っていたが、人や自分を観察するくどうさんの目線がどこから出ているかなかなかわからず、何よりも怖くて、どこから見られているんだ、なぜこんな場面を切り取ってくるんだ、この怖い時間はいつまで続くんだ、と思って、一気に読んでしまった。まさに、くどうさんというおばけに遭遇した気分だ。

例えば、雷のきらめくある天気の悪い日、くどうさんは駅で女の子にナンパをしている男性に出会う。よくある光景だ。しかし、くどうさんは男性の口から出た「馬に乗ったことがある」という内容の言葉を切り取る。そこに雷鳴が響き、くどうさんの目の前から男と女の子は消えてしまう。人がおばけになって、人間に釘付けになる瞬間ばかりが集まったようなエッセイ集。

書肆侃侃房　一四〇〇円

兄の終い

村井理子著

村井さんは実の兄を孤独死で亡くした。彼は離婚し、小さい息子と暮らしており、部屋は荒れていて村井さんとも仲が悪く、金をせびることもたびたび。村井さんはケータイで最低限の連絡だけを行っていた、そんな中の孤独死だった。

親族が死んだからといって悲しくも寂しくもないことなど、この世にたくさんある。しかし、死に関する手続きを行っていく中で、荒れ果てた兄の清掃を自分と同じように行っていた、兄と離婚した元妻が、自分と同じようには兄を疎んではいないことを知らされて、村井さんはショックを受ける。

大嫌いな人間が死んだとしても、悲しいと思うのもまたそうでもないと思うのも、人にとって自由なのだ。裁ける人などいない。そのことを静かに、私たちに教えてくれる本だと感じた。

ＣＣＣメディアハウス　一四〇〇円

すべて忘れてしまうから

燃え殻著

『ボクたちはみんな大人になれなかった』（新潮文庫・四三〇円）で、ままならない系小説を先駆けた燃え殻さんの二作目は、「週刊ＳＰＡ！」で連載していたエッセイをまとめた一冊。

思い出の断片が燃え殻さんのリズミカルな文章でひとつひとつ組み立てられ、目の前に鮮明に現れる。その懐かしくて少し切ない光景は、かつてわたしたちが通り過ぎた、なんてことなかった日々そのもの。心に深く刺さった棘のような日も、踊りだしそうな美しい日も、今となっては思い出すこともほとんどなくなってしまった。そんな大人に是非手に取ってほしい。

扶桑社　一五〇〇円

今月のおすすめ

文庫・新書

拝啓、本が売れません

額賀　澪著

松本清張賞と小学館文庫小説賞を受賞してデビューした著者。「本が売れない」と言われる時代において、「なんとか作家として生き残りたい」という危機感を持ち、売れる本を市場に送り出すために何ができるのか、を探る旅に出る。どうしたら本を売ることができるのか。まずはもちろん内容だろう。しかし、いくら内容が良くても売れる本ばかりではない。それ以外の要素を求め、本に関わるさまざまな立場の人々、編集者や書店員、Webコンサルタントやデザイナー、映像プロデューサーに話を聞き、「売れる本」とはどういうものなのか、ということを追求するのである。

書店員として、一冊一冊の本に込められた著者をはじめとするその本に関わった人々の思いを知り、改めて本を売るということについて背筋が伸びる思いがするし、そうして生み出された、作中に紹介される著者の作品やその他の本たちが今まで以上に魅力的に見えてくる。

文春文庫　六三〇円

京都深堀りさんぽ

グレゴリ青山著

なかなか遠出もできない状況の中、一捻りあるこの京都ガイドの本はいかがだろうか。もとの本は「京都ガイド本大賞」の「リピーター賞」を受賞したもの。文庫化にあたり、マンガの加筆や情報の更新がされている。

京都出身であるグレゴリ青山さんのマンガで案内されるのはいわゆる観光地からはちょっと離れている「穴場」を堪能できる場所である。

登場する案内人たちも個性豊かなその道のプロ揃い。京都の人でも知らなかったことを、グレゴリさんが濃いトークを引き出して非常に詳しく伝えてくれるので、京都の「伝統が日常」といった一面を知ることができる。

京都には何回も行ったことがあるという方にもおすすめしたい一冊。

小学館文庫　五〇〇円

政界ヤクザ

一橋文哉著

政界ヤクザ、総会屋、フィクサーなどと呼ばれ、日本の裏社会で暗躍してきた人々がいる。それは戦前から戦後にかけて、政治家や企業に喰い込み、莫大な利権を手にしてきた。本書では彼らの実態、系譜が入念に解き明かされていく。著者は、これまで未解決事件や闇社会が絡んだ経済犯罪事件を追究しつづけてきた。その取材力は本書でも遺憾なく発揮されていて、読み応えは抜群である。

本書を読んで改めて、戦後私たちが目にしてきた事件は、ほんの氷山の一角に過ぎないことを思い知らされた。その裏では莫大なカネが動き、政界ヤクザたちの知略を巡らせた熾烈な攻防が展開されている。彼らをカネ目当ての利権屋とみるか、はたまた国家大計を案ずる憂国の士とみるか。その判断は読者に委ねられている。

予備知識なしで読んでも十分面白いが、例えば現在講談社文庫から刊行中の『歴史劇画大宰相』シリーズなどと合わせて読むのも一手だろう。

角川文庫　七四〇円

今月のおすすめ

芸術

【新版】ポール・ランド、デザインの授業

マイケル・クローガー編
和田美樹訳

本書は二十世紀を代表するグラフィックデザイナーであり、教育者でもあったポール・ランドの講義録。ハンドブックのような薄さで、類稀なる知識人の人物像を伝える貴重な資料である。邦訳は十年以上前に刊行され、長い間入手困難となっていたが、このたび新訳にて復刊された。

四十年にわたる教員生活の中で、学生や同僚たちとの間で交わされた大量の対話のうち、二編が抜粋して収められている。鋭い指摘による厳しい授業を行うことで有名だった彼だが、ユーモラスでウィットに富んだ指導は評判で、デザインに対する姿勢は常に真摯だったという。また本書からは、生徒側の学びに対する熱心さと、何よりポール・ランドへの信頼をも感じ取ることができる。

デザインとは何か、定義を考えるための入門書の一つとしてもおすすめ。

ビー・エヌ・エヌ新社　一四〇〇円

家族写真の魔法

森藤ヒサシ著

幼い頃は家族の集合写真を撮っていた人も、思春期に差しかかる頃になると気恥ずかしかったり、それぞれ忙しくなったりして、その機会を徐々に失っていくことが多いのではないだろうか。

東日本大震災の被災者の体験談から、家族写真を保有することの大切さに改めて気付いた著者。他の人々が彼らと同じ後悔を味わうことのないよう、家族の絆を写真という記録媒体に定期的に残していく意味を、積極的に発信する決意をした。

写真スタジオの選び方も紹介されているが、自分たちの手で撮影をしたいという人々に向けて、スナップ写真の撮り方のコツも収録されている。また、著者が運営する写真館で撮影した画像も公開されており、幸せそうな数々の家族の姿にこちらの心も温まってくる。

これまで家族写真を撮る習慣がなかった方にも、読んでいただきたい一冊。

WAVE出版　一五〇〇円

世界・夢の映画旅行

往年の名作から、最近話題となった新作まで、全五十五作品の映画の舞台となった場所や、撮影場所を紹介している保本書。映画選定は、国内最大級の映画とドラマのレビューサービス〝Filmarks（フィルマークス）〟が担当。

興味を持った場所から映画を探すのでも、知っている映画から行きたい場所を探すのでも良し。見たい映画、行きたい場所がどんどん広がる一冊。

まさに夢のような世界に思いを馳せてみてはいかがだろうか。

パイインターナショナル　一八五〇円

今月のおすすめ　実用書　地図・旅行書

心を壊さない生き方
超ストレス社会を生き抜く メンタルの教科書

Testosterone　岡　琢哉著

タイトルの秀逸さから手に取ってみたのだが、著者二人の軽妙な掛け合い問答を主軸としながらも、精査された多くのエビデンスを紹介し、それに基づく対策を講じており、決して独りよがりでない本書の姿勢は好感が持てた。

二部構成となっていて、第一部は運動、食事、そして睡眠が健康維持にとっていかに大切かを説き、第二部では健康とメンタルとの相関性に焦点をあてている。メンタル症状に関してそれぞれチェックリストを提示しているため、読者は自分の状態を理解できる。また、該当者にとってはそのための対処法もいくつか提示しているので、前向きな気持ちで読書を進めることが出来るだろう。この真面目な編集方針は高く評価できるだろう。

項目ごとに要点が箇条書きでまとめられている構成も明快で、短時間で読めるのも良い。

現在ストレスを感じている方はもちろん、そうでない方も、予防対策として一度この本に目を通すことをお薦めしたい。

文響社　一四五〇円

東京の美しい洋食屋

井川直子著

料理人、サービス人、生産者など食と酒にまつわる「人」と「時代」を描き出す著作を持つ井川直子が、東京・横浜の洋食の名店三十二店を丹念に取材。明治期、外交や社交のために上流階級や外国人が食する料理だった西洋料理が、市井の人々のハレの日の料理として広がっていった日本の洋食。ノスタルジックな文脈で語られがちだが、愚直なまでに誠実な料理人たちの一流の仕事として、その歴史と今を綴る。建築書を多く出す出版社の書籍なので、写真も美しい。

エクスナレッジ　一六〇〇円

世界の郷土料理事典

青木ゆり子著

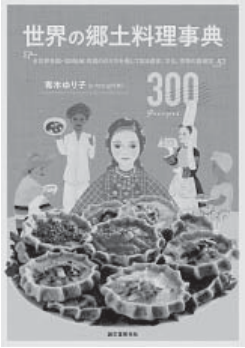
同じ国の料理でも、地域によってそれぞれ異なる郷土料理が存在する。食文化を学ぶ上で外せない歴史や風土、宗教による食規定とともに、世界各国三〇〇地域もの郷土料理がレシピ付きで紹介されているのが本書である。

入手困難な食材は代替案まで用意されており、すべての料理がほぼ再現可能なのが嬉しい。

日本からは京都、長崎、北海道・アイヌ、沖縄の料理が紹介されているのだが、思い当たる料理はおありだろうか（正解は、読んでからのお楽しみだ）。

知識欲と食欲がかき立てられる食文化の事典。ぜひ、一家に一冊常備したい。

誠文堂新光社　二三〇〇円



今月のおすすめ

語学・辞典

ライティング力を磨く 英単語厳選626

東　皇佑・舟口　力著

大学受験で使われる英単語帳に多く見られる共通点として、具体的にどのような状況で使うための英単語かが分からないということがある。漠然と語彙力を上げるためと言っても直接点数に結び付かないという現実に直面した人は多いかもしれない。そうした現状から、本著は英語の特にライティングのセクションに注目した単語帳になっている。

本単語帳では、単語ごとに「意味」と「解説」、そして「よくあるミス」と「頻出の熟語」が掲載されている。単語をうのみにして覚えるだけではなく、より実戦力が身につく構成になっている。

単語帳を一冊終えた人、英語を学び直したいと考えている初級者から中級者におすすめの一冊だ。

ベレ出版　一八〇〇円

ためぐち英語Dialog

トーマス・K・フィッシャー著

前著『ためぐち英語』（高橋書店・一一〇〇円）のテーマは、「ネイティブが日常的に使っている英語表現」。フレーズ集というと、訳文に対してセンテンスがただあるイメージだが、この本はセンテンスのキーとなる単語の頭文字を教えてくれている。何もヒントがない状態から考えたり記憶を探ったりするのはなかなか骨が折れるが、すこしでもパーツが与えられていると、たちまちクイズのように思われて、答えを考えるのが楽しくなるし、とっかかりがあるので記憶の整理もしやすくなる。効率のよい暗記の助けとなってくれるのだ。

そんな『ためぐち英語』シリーズの第二弾となる本書は、それがもっと近しい友人のようになったものだといえる。ウィットに富んだ言い回しは変わらず、それらは会話形式になっており、フレーズの下には相手からの返事が書いてある。学習には一人で黙々と机に向かわなければならない時間がつきものだが、そんなときに「レスポンスがある」というのはなんだかあたたかい。今は海外旅行も難しいし、今までどおり現地の人と話すこともできないだろう。そんなときだからこそ、この本はますますの魅力を発揮するはずだ。

高橋書店　一一〇〇円

新版　口を鍛える韓国語作文 初級編

白姫恩（ペク ヒウン）著

韓国語は日本語母語話者にとってはとても学びやすい外国語だと言われている。韓国語と日本語は文法的に似ている部分が多く、日本語と韓国語を入れ替えるだけでも立派な文章を作ることができる。

この本は入門者が、書く・読むスキルの次に上手くなりたいと考える韓国語のスピーキングトレーニング本だ。

特に、重要な語尾をしっかりと学んで、声に出して言うトレーニングを常にしていく事で、スピーキング能力を鍛えていくことが出来る。

音声がダウンロードできるので、シャドーイングをするくせをつけていくと、韓国ドラマを見ながらもセリフを言ってみたくなること間違いなし。

コスモピア　一八〇〇円

今月のおすすめ　児童書

ぼくといっしょに

シャルロット・デマトーン作
野坂悦子訳

オランダのロングセラー絵本。りんごのおつかいにいくぼく。その日常の一コマが「ぼく」の世界では壮大な冒険ストーリーとなっていくお話。一歩踏み出せば森の中、そこには巨大なドラゴンが住んでいて、またまたページをめくれば大男が寝ていたり、と。「ぼく」とページをめくる「わたし」はいっしょに冒険の旅にでているかのよう。読後感は心地よい爽快感とワクワク感でいっぱいになり、忘れかけていた子どもの頃の気持ちとどこか懐かしさを思いおこさせてくれます。いつもと同じ一日が視点や捉え方を変えるとこんなにも世界が広がるのかと改めて気づかされます。ページをめくる度にどんな世界が待っているのかと本の楽しさも実感できます。そして絵には、人魚や赤ずきんちゃんやオオカミも隠れていて魅力的。新たに発見することでまたストーリーが広がりそうです。

ブロンズ新社　一四〇〇円

ここは

最果タヒ文　及川賢治絵

「ここ」っていったいどこだろう？

「ここ」という言葉が表すもの、それはおかあさんのひざの上にいる男の子にとって、目に映っている部屋の中、窓の向こうの景色と行き交う人々の様子が見えるところ。触れている人のぬくもりが感じられるところ。小さな小さな世界のようでいて、でもそれはもっともっと大きなものにつながっている。

男の子がやがておかあさんのひざから降りて、自分の足で一歩踏み出したとき、家の中から外の世界へ飛び出したとき、彼にとっての「ここ」はどんな風に変わるんだろう？　目の前の風景は様々に変化し、沢山の人が彼といっしょに居てくれたり去って行ったりするだろう。でも、何がどう変わろうとも、「ここ」は必ず彼が中心。そして広大な宇宙の真ん中。何も変わらない。だから安心していいよ、と背中を撫でてもらったような絵本。

河出書房新社　一三〇〇円

グラフィック版　アンネの日記

アリ・フォルマン編
デイビッド・ポロンスキー絵
深町眞理子訳

約五〇〇頁から成る文庫版が一五〇頁に凝縮された本書。「はじめまして」の子どもはもちろん、再読する大人にも読み応えのあるグラフィック版が刊行された。

戦下における悲惨さの描写はリアリティ溢れる一方、隠れ家での様子は「日記にはすべての不自由をユーモアまじりに描く」というアンネの信条が見事に反映されている。彼女の表情に心の動きが息吹を持っているように感じられる点も、グラフィック版の醍醐味だろう。

あすなろ書房　二〇〇〇円

ATION

丸善
アピタ知立店
☎(0566)91-7170
〔営業時間〕
月～土10時～21時半
日 9時～21時半

丸善
ヒルズウォーク徳重店
☎(052)846-2610
〔営業時間〕10時～21時半

丸善
イオンタウン千種店
☎(052)715-7911
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
名古屋栄店
☎(052)212-5360
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
名古屋店
☎(052)589-6321
〔営業時間〕10時～21時

丸善
岐阜店
☎(058)297-7008
〔営業時間〕10時～21時

丸善
四日市店
☎(059)359-2340
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
滋賀草津店
☎(077)569-5553
〔営業時間〕10時～22時

丸善
京都本店
☎(075)253-1599
〔営業時間〕11時～21時

ジュンク堂書店
高槻店
☎(072)686-5300
〔営業時間〕10時～22時

丸善
髙島屋堺店
☎(072)225-0930
〔営業時間〕10時～19時半

MARUZEN＆ジュンク堂書店
梅田店
☎(06)6292-7383
〔営業時間〕
平日9時半～22時
土・日・祝9時～22時

丸善
八尾アリオ店
☎(072)990-0291
〔営業時間〕10時～21時

丸善
髙島屋大阪店
☎(06)6630-6465
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
大阪本店
☎(06)4799-1090
〔営業時間〕9時～21時

ジュンク堂書店
難波店
☎(06)4396-4771
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
天満橋店
☎(06)6920-3730
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
上本町店
☎(06)6771-1005
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
近鉄あべのハルカス店
☎(06)6626-2151
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
橿原店
☎(0744)29-0781
〔営業時間〕10時～18時半

ジュンク堂書店
奈良店
☎(0742)36-0801
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
西宮店
☎(0798)68-6300
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
芦屋店
☎(0797)31-7440
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
神戸住吉店
☎(078)854-5551
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
三宮駅前店
☎(078)252-0777
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
三宮店
☎(078)392-1001
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
神戸さんちか店
☎(078)335-2877
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
舞子店
☎(078)787-1250
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
明石店
☎(078)918-6670
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
姫路店
☎(079)221-8280
〔営業時間〕10時～20時

丸善
岡山シンフォニービル店
☎(086)233-4640
〔営業時間〕10時～20時

丸善
広島店
☎(082)504-6210
〔営業時間〕10時～22時

ジュンク堂書店
広島駅前店
☎(082)568-3000
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
高松店
☎(087)832-0170
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
松山店
☎(089)915-0075
〔営業時間〕10時～21時

丸善
博多店
☎(092)413-5401
〔営業時間〕10時～21時

8月7日 移転OPEN！
ジュンク堂書店
福岡店
☎(092)738-3322
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
大分店
☎(097)536-8181
〔営業時間〕10時～20時

丸善
天文館店
☎(099)239-1221
〔営業時間〕10時～20時半

ジュンク堂書店
鹿児島店
☎(099)216-8838
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
那覇店
☎(098)860-7175
〔営業時間〕10時～22時

INFORM

MARUZEN &ジュンク堂書店
札幌店
☎(011)223-1911
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
旭川店
☎(0166)26-1120
〔営業時間〕10時～19時半

ジュンク堂書店
弘前中三店
☎(0172)34-3131
〔営業時間〕午前10時～
午後7時

ジュンク堂書店
盛岡店
☎(019)601-6161
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
秋田店
☎(018)884-1370
〔営業時間〕10時～20時

丸善
仙台アエル店
☎(022)264-0151
〔営業時間〕10時～21時
日・祝10時～20時

ジュンク堂書店
仙台TR店
☎(022)265-5656
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
新潟店
☎(025)374-4411
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
郡山店
☎(024)927-0440
〔営業時間〕10時～19時

丸善
水戸京成店
☎(029)302-5071
〔営業時間〕10時～21時

丸善
日立店
☎(0294)32-7401
〔営業時間〕10時～20時

丸善
丸広百貨店飯能店
☎(042)973-1111
〔営業時間〕10時～19時

丸善
丸広百貨店東松山店
☎(0493)23-1111
〔営業時間〕10時～19時

ジュンク堂書店
大宮髙島屋店
☎(048)640-3111
〔営業時間〕10時～21時

丸善
桶川店
☎(048)789-0011
〔営業時間〕10時～21時

丸善
津田沼店
☎(047)470-8311
〔営業時間〕10時～21時

丸善
舞浜イクスピアリ店
☎(047)305-5808
〔営業時間〕11時～21時
土・日・祝10時～21時

ジュンク堂書店
南船橋店
☎(047)401-0330
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
柏モディ店
☎(04)7168-0215
〔営業時間〕10時半～20時

MARUZEN &ジュンク堂書店
渋谷店
☎(03)5456-2111
〔営業時間〕10時～21時

丸善
丸の内本店
☎(03)5288-8881
〔営業時間〕9時～21時

丸善
日本橋店
☎(03)6214-2001
〔営業時間〕9時半～20時半

丸善
お茶の水店
☎(03)3295-5581
〔営業時間〕
月～金10時～20時半
土10時～20時
日・祝10時～19時

丸善
多摩センター店
☎(042)355-3220
〔営業時間〕10時半～21時

丸善
有明ガーデン店
☎(03)5962-4180
〔営業時間〕10時～21時

丸善
有明ワンザ店
☎(03)5530-5701
〔営業時間〕10時～19時半

丸善
メトロ・エム後楽園店
☎(03)5684-5130
〔営業時間〕10時～21時

丸善
新宿京王店
☎(03)5321-8327
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
池袋本店
☎(03)5956-6111
〔営業時間〕10時～22時

ジュンク堂書店
プレスセンター店
☎(03)3502-2600
〔営業時間〕11時～19時

ジュンク堂書店
大泉学園店
☎(03)5947-3955
〔営業時間〕10時～22時

ジュンク堂書店
吉祥寺店
☎(0422)28-5333
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
立川髙島屋店
☎(042)512-9910
〔営業時間〕10時～21時

丸善
横浜みなとみらい店
☎(045)323-9660
〔営業時間〕11時～20時

丸善
ラゾーナ川崎店
☎(044)520-1869
〔営業時間〕10時～22時

ジュンク堂書店
藤沢店
☎(0466)52-1211
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
岡島甲府店
☎(055)231-0606
〔営業時間〕10時半～19時

丸善
松本店
☎(0263)31-8171
〔営業時間〕10時～20時

MARUZEN &ジュンク堂書店
新静岡店
☎(054)275-2777
〔営業時間〕10時～21時

丸善
名古屋本店
☎(052)238-0320
〔営業時間〕10時～21時

営業時間は変更する場合がございます。ご了承ください。
定休日については、お手数をおかけしますが弊社HPまたは直接各店までお問い合わせ下さい。

投稿募集

☆読者の皆様の投稿を募集しています。最近読まれた本の感想文、本にまつわるエッセイ、など本に関するもの。最近読んでおもしろかった本、感動した本、考えさせられた本を教えて下さい。四〇〇字～六〇〇字程度で、おすすめの本のタイトル、出版社、住所、氏名（ペンネーム可）、年齢、職業を明記の上、お送り下さい。掲載分には二千円の図書カードを差し上げます。なお、原稿はお返しいたしませんのでご了承下さい。

☆尚、本誌掲載と同時に、ホームページにも掲載させていただきます。

〒171-0022 東京都豊島区南池袋二―一五―五
丸善ジュンク堂書店「書標」編集室係
TEL〇三―五九五六―六一一一

いつも「書標」をご愛読いただきまして
ありがとうございます。本誌定期購読料は
以下の通りです。
定期購読料　年間一六八〇円（送料込）
現金書留もしくは一四〇円切手十二枚で

お申し込み先

〒171-0022 東京都豊島区南池袋二―一五―五
丸善ジュンク堂書店特急便係
TEL〇三―五九五六―六一二〇
FAX〇三―五九五六―六一〇〇

PC・スマートフォンから
http://www.junkudo.co.jp/
QRコード

ブックブレスユー

編集後記

新型コロナウイルス感染防止対策の影響で、三月～五月にかけて各地の店舗に臨時休業や短縮営業が発生し、大変ご迷惑をおかけいたしました。現在一部を除きほぼ全店で営業再開の運びとなりました。

引き続き感染防止のため、店舗では安全対策の徹底を行い、お客様にもマスク着用や間隔を開けたレジ待ち等のご協力を頂くことになりますが、何卒ご理解を賜りますようお願い申し上げます。（同）

本屋うらはなし

『本のしるべ 書標』へのみじかい手紙

通巻五〇〇号、おめでとうございます。

一九七八年十月発行の第一号から、四十年以上にわたり、読者を本の世界、書店の世界に誘ってきたのですね。

ぼくもまた、入社した一九八二年の九月（四十八）号からほぼ毎号、約四五〇本の書評を掲載していただきました。

ぼくの書評が、特段優れたものだったとは、思いません。依頼されるとババ抜きでジョーカーが回ってきたような顔をする社員が多い中、毎号の執筆を喜んで受諾した、ちょっと変わった新入社員であっただけです。

毎月の書評を引き受けたら、少なくとも一ヶ月に一冊は、これという新刊を見つけて読まないといけない。そんな「縛り」が、自分が怠け者であることを誰よりもよく知っていたぼくには、とてもありがたかったのです。鵜の目鷹の目でそうした新刊書を探す作業は、書店員としてのぼくも育ててくれたと思います。

短く拙い書評でも、どういう風に読んでもらえているのか、いつも気になっていました。ある時、著者も同じ気持ちを抱いているのではないかと気づき、評した本の著者に『書標』を送り始めました。実際に本を売っている書店員であることが有利に働いたこともあったでしょう、多くの著者の方から暖かく丁寧な返信を頂きました。そして、今に至るまでお付き合い下さっている方も多く、たくさんのことを教えて下さいました。

いつしか、書評を書くにあたって、次のルールを自分に課すようになりました。その本が何を主張しているか、その本を今読むことの意味は何かを、短い紙幅の中にも必ず盛り込むこと。

新聞の読書欄には、時折、本のテーマはそっちのけに、「この点については自分（評者）の方がよく分かっている」といわんばかりの書評が見られますが、本を売る立場にあるぼくたちには、無意味です。批判するのはいいのですが、その場合は必ず、敢えて評者にとってはアウェイである著者のフィールドに踏み込んでこそ、書評は書評たりえます。「相手の決め球」を打たなければならないのです。ぼくのような「門前の小僧」は空振りの連続かもしれませんが、時に見当外れなことがあっても、その姿勢自体は、本好きのお客様や著者ご本人にも、必ず伝わります。

「本屋はわたしの学校だった」

本屋の大先輩が、自らの回想記の副題に使われました。素朴にして真です。

多くの「先生」方に恵まれたぼくは、実に幸運な「生徒」でした。

（フ）

「書 標 ほんのしるべ」 第500号
編集・発行人 中川清貴
発行所 ㈱丸善ジュンク堂書店 〒160-0008 東京都新宿区四谷三栄町十一番二十四号 ニューフィールドビルディング
印刷所 ㈱七旺社 〒653-0012 神戸市長田区二番町四丁目二十七番地
二〇二〇年八月五日発行 頒価五十円（本体四十六円）

「書標　ほんのしるべ」昭和61年7月15日第三種郵便物認可
2020年8月5日発行（毎月1回5日発行　通巻第500号）

MARUZEN JUNKUDO × サマリーポケット

預けた本は一覧で管理。タイトルや作者もデータ登録！

文庫本なら1箱に130冊入ります！
サイズ：幅45cm × 奥行34cm × 高さ23cm

丸善ジュンク堂書店のお客様限定プラン

3箱保管プラン ｜ 通常月額 1,200円 ····▸ 25%OFF 900円
5箱保管プラン ｜ 通常月額 2,000円 ····▸ 30%OFF 1,400円

詳細はこちらから
https://spkt.jp/maruzen

※ バーコードを読み込んで画像やタイトルをデータ登録します。バーコードがないもの等は適宜まとめて写真を撮影します。
※ 価格は全て税別表示です。
※ 本プランの対象となるのは、「サマリーポケット」に新規登録される方に限ります。
※ 本プランはサービス利用開始後24ヶ月間有効です（翌月以降は通常料金となります）

ご利用方法は簡単4ステップ

1

専用サイトで申し込み

2

届いたボックスに
本を詰めて送るだけ

3

預けたものは
PC・スマホで管理

4

使いたい時、最短翌日に
取り出せる

本の保管場所に悩む、すべての方へ

ジュンク堂書店
淳久堂書店

MARUZEN

頒価　五十円（本体　四十六円）